

# 葡萄考 (I)

## — 葡萄のルーツ —

### A Study of Grapes (I): The Origin of Grapes

(1993年4月7日受理)

菅 淑江  
Yoshie Suga

田中由紀子  
Yukiko Tanaka

Key words: 葡萄, 干し葡萄, 葡萄唐草

## 緒 言

ここ岡山県は葡萄の名産地として有名であるばかりでなく、それらを原料とした葡萄酒も生産している。そして岡山県だけでなく山梨県や奈良県そのほか日本の各地に葡萄の有名な産地があるが、一体いつ頃からこの日本の地に葡萄が栽培されるようになったのだろうか。葡萄の木そのものが持つ性質から見れば、高温多雨な日本に原生していたとは考えられない。古く飛鳥・奈良の時代の国宝に葡萄唐草の文様が見られるのは、唐朝の影響であるとするのは衆知のことであるが、栽培についての常識としては、文明開化の波に乗ってアメリカから栽培品種が入って来て、日本に於ける葡萄栽培が始まったとされている。また中国における葡萄の歴史やアメリカやヨーロッパでの葡萄栽培の経過は、多くの文献や書物に書かれているがいずれも断片的である。そこで、今回は葡萄に関する歴史を年代的にグローバルな視野から、著者らの見聞と調査を基礎として系統的にまとめた。葡萄をワインかデザートぐらいにしか意識していない日本人にとって、葡萄の重要性には思い至らないが、この葡萄の利用は西アジアの人々にとっては、生活と切り放すことの出来ない大切な問題なのである。

## 1 日本では

僧の行基が718年(養老2年)に中国から渡来した法薬である葡萄の栽培を、山梨県の勝沼の村人たちに教えた。これが日本に葡萄が栽培されるようになった最初であり、またこれが勝沼葡萄の由来であるとの説がある。そして現在勝沼には行基が自ら刻んだとされる、葡萄を右手に持つ薬師如来像が大善寺に残っているということである<sup>1)</sup>。当時はこれら収穫された葡萄はあくまでもそのまま人々の口に取られる程度であつたらしい。また一方、今より約800年前(1186年)甲府の雨宮勘解由(かげゆ)が、中国から渡来した実生の苗を挿し木により繁殖させ、栽培したのが最初であると言う説もある<sup>2)</sup>。しかし寺沢<sup>3)</sup>は「弥生時代の224遺跡から出土した298種類にのぼる植物の遺体を検討し、そのうち175種が食用として利用できるものであり、栽培種でも、主食たる穀物類のほかに果実類や嗜好品に属するものなど、きわめて多種多様の植物が弥生人によって利用されていることを知った。しかも85種類もの植物

が弥生時代に新たに加わったこともわかった。」と述べている。そして彼の示す植物食の出土遺跡数の図表には、葡萄類の確認された遺跡数は26の数字が示されていて、それは全体の約10%に当たる。このことから弥生時代には葡萄は限られた範囲で栽培されていたと理解することができる。しかし、この時代以前の日本に於ける葡萄のルーツは依然として不明である。その後は葡萄の木の性質上栽培がうまく行かなかったのか、日本の国内では栽培は拡大せず、限られた地域にのみ栽培されていたと考えたい。やがて明治の時代になり、文明開化の波に乗ってフランスおよびアメリカから数多くの品種が輸入されたが、気候が不適当であったことと、栽培技術が進んでいなかったためにほとんどが失敗したといわれている。ただアメリカ系のヴィティス・ルブルスカだけが日本の気候になじんで、各地に栽培されるようになり大きく発展した<sup>4)</sup>。その後ヨーロッパ系の品種が岡山県を中心にガラス室葡萄として発展したのが事実のようである。特に新潟県高田の川上善兵衛は小作人たちのために、ワインの製造に着目して長年の研究の末、交配による葡萄品種改良の結果作り出されたマスカット・ベリーAは、日本の赤ワイン品種として有名である<sup>5)</sup>。

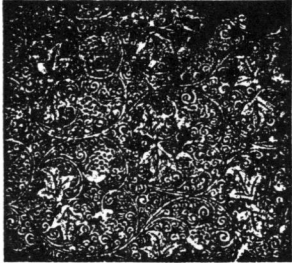
また、一方8世紀に書かれた現存する日本最古の書物古事記<sup>6)</sup>の中で、伊邪那美命を尋ねて黄泉の国に行った伊邪那岐命が、黄泉醜女(よもつしこめ)に追い掛けられて逃げて帰る途中で、伊邪那岐命は黒御鬘を取って投げれば、それが蒲子(えびかつらのみ)となり、黄泉醜女がそれを食べている間に逃げる時間を稼いだと語られている。同様な物語りが日本書紀<sup>7)</sup>にも書かれていて、『黒鬘(くろきみかつら)を投げたまう。此即ち蒲陶(えびかつら)に化成(な)る。』とある。そして、このえびかつらは何れも葡萄の実であると理解されているのである。俗にいう山葡萄も当時野生していたかも知れないが、本草綱目にはこれらは葡萄科のエビヅルまたはゴユミであり、葡萄に似ていて実は小さくて円く、色はそれほど紫ではない云々とあり、上記のえびかつらとは別の植物である。

さらに芸術の立場から見れば、正倉院の御物をはじめとして法隆寺や東大寺等に保存されている飛鳥・奈良の宝物の中には、葡萄をモチーフにしたものが多くある。それらから数例を取り上げるが、薬師寺金堂の薬師如来像台座の葡萄唐草(図1-1)や東大寺の葡萄唐草文染章(図1-2)、大山祇神社の禽獣葡萄鏡(図1-3)、正倉院の鳥獸花背方鏡(図2)など奈良時代の宝物の葡萄唐草模様は何れも我が国8世紀の国宝のものであり、文様は葡萄が写実的に取り扱われて唐草模様として整然と連続し、その特徴をよく捕らえている。そのためには葡萄をよく知っている者がデザインしたと考えられる。さらに正倉院の御物香印坐の最下段の連弁は金箔で縁取りし丹地に宝相華文に花喰鳥をあしらっているが、この花喰鳥は明らかに葡萄の房をくわえている(図3)。萼のように見えるのはグレコロマン型のアカントス唐草(欄外註)に由来する葉状の花である。このような萼状に包まれた葡萄の房は、洛陽郊外にある679年に造営された高句麗の泉蓋蘇文の長子の墓誌蓋の刻銘の周りに刻まれていると言うことである<sup>8)</sup>。これらの国宝は何れも当時の日本が唐との交流により入手したものか、あるいは唐から来朝した職人が作ったものかは一概には決められないが、その素晴らしさは唐朝文化によるものである。以上に述べたことから日本に於ける葡萄の歴史は、古代中国の影響を受けて始まったと言っても良いと考える。したがって中国における葡萄の歴史を調べる必要がある。

欄外註 グレコロマン美術；ギリシアとローマの混合様式であるが、むしろローマ人の要望と趣味に合うようにギリシア人作家が、ローマにおいて制作したギリシア的美術のことで、彫刻、絵画、建築に認められる。前1世紀頃から始まり紀元前2-3世紀頃まで、ヘレニズムに続きローマ様式の確立と共に終わる。



1 奈良時代、葉師如来像台座(葉師寺金堂)



2 奈良時代、葡萄唐草文染草(東大寺)



3 奈良時代、禽獸葡萄鏡(大山祇神社)

図1 『原色版国宝2』

毎日新聞社 (1968) P.162より転載



図2 鳥獸花背方鏡

『正倉院』原色日本の美術4

小学館 (1967) P.62より転載

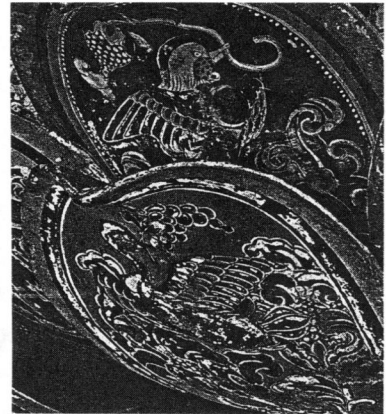


図3 正倉院御物香印座下段連弁  
『正倉院』原色日本の美術4

小学館 (1967) P.32より転載

## 2 中国における葡萄の歴史

中国には野生の葡萄が古来より食用にされていたということであるが<sup>1)</sup>、栽培品種が輸入されて葡萄を植えて葡萄酒を造るようになったことについての詳細は史記の大宛列伝に述べられている<sup>2)</sup>。それは、今から2000年以上も昔にさかのぼるのである。漢の武帝が紀元前137年に張騫を西域に派遣したが、多くの苦難の末張騫は13年ぶりに祖国へ帰ることができた。その間に彼が訪れた国は大宛、大月氏、大夏、康居であったが、その周囲にある数ヶ国のことも聞き及び、それらの見聞を詳しく武帝に報告した。司馬遷はその事実をつぎのように記している。『大宛の人、葡萄を以て酒を為る。富人、酒を蔵すること万余石に至り、久しきもの数十歳を敗れず。俗は酒を嗜み、馬は苜蓿を嗜む。漢使、その実をとりて来る。是に於いて、天子は始めて苜蓿、葡萄を肥饒の地に植える<sup>3)</sup>。』と。だが城山が著書の中で述べている要旨を以下に記す。「張騫が西域の新しい知見を持ち帰ったとされる元朔3年より10余年、史記に書かれている漢使の葡萄の種の将来よりは25年余りも以前に葡萄の文字が見られるのである。すなわち武帝が即位して間もなく司馬相如(前179-117)が武帝に献じた賦には、上林苑の景色が画かれているが、そこに上げられている植物名の中に果としての葡萄の字があり、これは野生の葡萄と呼ばれているものではないと注がついている。さらにさかのぼって紀元前200年頃漢の高祖の時代にすでに葡萄文様を配したと推察される織物蒲桃錦が伝来していた。また紀元前70年頃霍という人の妻が蒲桃錦の製法を祖母に教わり、自家作成したという記録が西京雜記に見られるという。このことから漢の人達はこのころすでに錦織の文様によって、葡萄のことを知っていたのではないか。西方のどこかに良馬があるとい

う情報とともに葡萄のことも知っていたであろう。その根拠は古代イラン人がパミール高原を東に越えて砂漠周辺に移り住んだのは紀元前1000年ころにはじまるとされているし、またスキタイ人が紀元前4-3世紀を盛期として、天山北路の草原を東西に活躍して匈奴に文物を伝えたが、その本拠地黒海沿岸からの葡萄酒も含まれていた。従って武帝も張騫も含めて漢の人々は当然葡萄酒も知っていたのではないか。」と書いている。漢の武帝の積極的な河西進出以後、多くの国使が西域と交流し、西域の文化とともに珍



図4 史書による葡萄の産地

『黄土に生まれた酒』 花井四郎 東方書店 (1992) より転載

しい品物や動植物さらに胡人と呼ばれる商人や芸人たちが、当時の都長安に溢れ、そこからまた、西に東にと行き交ったであろう。それに伴って往来の道も賑わい、ささやかに営まれていたオアシスの葡萄栽培がますます盛んになったのであろう。天山山脈の南麓と崑崙山脈の北側に流れ出た雪解け水は地下に潜り伏流水となって、カレーズによって再び地上に導かれてオアシスを造る。こうして造られたタクラマカン砂漠の周囲のオアシスにも葡萄園が営まれ、葡萄酒が醸し出されたであろう。史書によるこれらの葡萄産地(図4)をつなぎ合わせれば、これはまたシルクロードに他ならない。現在中国各地に産する馬乳葡萄、宣化白葡萄、水晶葡萄、緑葡萄、無核白(ウーハイバイ)などはそれらの改良されたものである。中でもトルファンの葡萄はハミのメロンとともに砂漠の大切な産物となり、葡萄溝と呼ばれる葡萄畑は実に広大である。さらに日干し煉瓦で建てられた葡萄乾燥のための建物群が、斜めの光線によって描き出される景色もまた言葉には表せないくらい見事な景色である。(写真1, 2)ここで採取された美しい緑色の干し葡萄の味は格別であり、敦煌と名づけられた白葡萄酒は絶品である。また特に粒が牛の乳首形をした宣化ミルク葡萄は粒の大きさと美味で有名である<sup>5)</sup>。これらの葡萄の産地の民家では庭院と呼ばれる葡萄棚が作られ、その下で家族や友人が集い食事をしたりお茶を飲んで楽しむ団欒の場所なのである。(写真3)

やがて中国にも仏教が伝来し、法顕がインドへ經典を求めて旅立ったころ、雲崗石窟の開掘がはじまり、そこには見事な葡萄唐草が彫られて居るのである。紀元490年代の造営とされる第12洞窟主室南壁の明かり窓を囲んで葡萄唐草の文様が見られる。また第13洞の本尊光背の



写真1 干葡萄棚の中

トルファンにて、筆者撮影

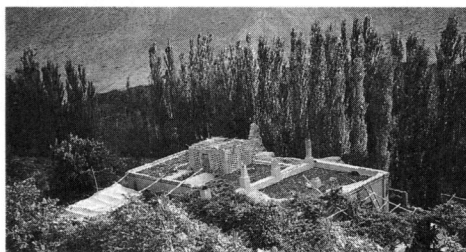


写真2 谷の下の建物の屋上の干葡萄棚と広げられて乾燥している干葡萄

ベゼクリク千仏洞から筆者撮影

上を飾る覆いにも葡萄唐草の文様を見ることができるのである。こうして文様として葡萄唐草がこの地に伝来したのは遺例に関する限り、南北朝（5世紀）以後のことであると林<sup>6)</sup>は言っている。

唐の時代となり中国は豪華絢爛たる生活が営まれるようになるのであるが、すでに高句麗、百濟、新羅とも交流があり、三蔵法師玄奘が天竺への求法の旅に上り、仏教が盛んになるにつれ仏教美術工芸もまた豪華絢爛なものとなっていった。やがてこれら唐の文化は日本にまで影響を及ぼしたのである。前章で述べた正倉院宝物やその他奈良時代の宝物の素晴らしさは、その母なる唐朝文化によって育てられたのであるが、唐の時代は中央アジアの異文化を真似しただけではなく、高度の普遍性のある文化に育て上げたのである。したがってこれら宝物の素晴らしさは古代の国際性を持っていることにある。そしてこの葡萄唐草の文様が西アジアから地中海沿岸、エジプト、ギリシア、トルコ、イタリア更にヨーロッパ各地にまでも広がっていったのも事実である。



写真3 民家の庭院

トルファンにて、筆者撮影

### 3 聖書から

人類の文明はすでに約1万年前から芽生えていたとされるが、その頃から紀元前8000年にかけての西アジアでは山岳地帯に狩猟と麦類を主とする生活が行われていた。事実シリアのテル・アブ・フレイラ（現代のヨルダンのテル・アスワド）の遺跡からアーモンド、いちじく、ピスタチオなどと共に、葡萄が西アジア初期農耕文化に於ける果実類として検出されている<sup>1)</sup>。紀元前5000年頃から4000年頃のジャルモ（イラン）、ハッスナ、ニネベ、サマラ（イラク）などの遺跡からは、山麓へ降りて来て灌漑農耕を始めた人類の生活文化の進歩の様子を伺い知ることができるのである。やがて、初期王朝（紀元前3000年頃）になるとティグリス・エウフラテス両大河の河口あたりに移り住んだとされるシュメール人によって楔形文字がつくられ、多くの経済文書とともに口承文学的な記録が残された。とりわけ「ギルガメシュ叙事詩」は人間の知られている歴史の中で最も初期の作品の一つである<sup>2)</sup>。この中の第九の書版5（テキストA）にギルガメシュがたどり着いた楽園の詳細が描かれていると推定される数行がある。それには「葡萄の実が垂れ下がっていて、青葉がついているのを眺めるのは心地よかった。」と言う意味のことが書かれている。ここに初めて文字としての葡萄が確認されるのであるが、先にも述べたように口承文学的な作品であるから、それ以前の長い間の歴史的事実として、葡萄もまた人々の生活の中で大切な植物であり、愛され食べ続けられてきたと信じたい。河野<sup>3)</sup>は『食べ物から見た聖書』と題する著書の中で「旧約聖書には、葡萄酒や酒の出でるところが約500箇所もある。」と述べている。旧約聖書の中で最もよく知られているノアの箱舟の話が出てくる創世記9章の20-21節には、「大洪水から助かったノアは農夫となり、葡萄畑をつくり始めたが、彼は葡萄酒を飲んで酔い、天幕の中で裸になっていた。」と書かれている。さらに聖書によるとアブラハムは現在のベルシャ湾岸とされるカルデアのウルを出発して、ハラン（シリア北部エウフラテス川沿いの地）に留どまり、やがてカナン（パレスチナの古代の名称の一つ）の地にたどり着くのであるが、この道筋は後に肥沃な三角地帯と呼ばれ、古代農耕民族

が住んでいた歴史的遺跡の多い所なのである。この地帯を背景として綴られたと考えられる聖書には葡萄や葡萄酒が多く出てくるし、現代のキリスト教やユダヤ教の信仰生活の中では欠かすことの出来ない葡萄酒であるが、意外にも考古学的な見地からはこの時代の葡萄利用について論じたものが比較的少ない。アダム時代に既に出て来るいちじくとともに、葡萄は①水分と糖分が多く、②採集して何の加工もせずにそのまま食べることができ、③乾燥して保存用の食糧となるこれら液漿果の利用は当然のことであつたらうし、まして乾燥地における水分の供給源の役割は大きく、作り方の簡単なワインもまた日ごろの生活の楽しみであつたであろうと考えるのである。

さらに旧約聖書のページを進めて行くと、出エジプト記23章の14節には、「あなたは6年の間自分の土地に種を蒔き産物を採り入れなさい。しかし7年目にはそれを休ませて、休閑地としなければならない。あなたの民の乏しい者が食べ、残りを野の獣にたべさせるがよい。葡萄畑、オリーブ畑の場合も同じようにしなければならない。」と書かれている。この頃にはすでに葡萄畑耕地面積がかなりあつたと推定される。またシナイ山頂でモーセが神から十戒を与えられたのに続いて、民に与える多くの法をも示された。その中で盗みと財産の保管について「人が畑あるいは葡萄畑で家畜に草を食べさせる時、自分の家畜を放って他人の畑で草を食べさせるならば、自分の畑と葡萄畑の最上の産物をもって償わねばならない。」と、ごく日常の当然のことのように葡萄畑が取り上げられている。この創世記が書かれたのは紀元前5世紀とされている。これらの物語りはそれ以前から語り聞き伝えられた事柄を書き記したものであるが、聖書の考える古代文明の中心は、創世記2章10-14節によればエデンから流れ出た川の水で潤されていたエジプトとメソポタミアであると考えていたようである。ちなみにこのモーセの出エジプトの物語りは紀元前1300年頃のこととされている。いずれにせよ葡萄は聖書の中では日常生活に欠かせない大切な聖樹として多くの箇所に取り上げられている。

さて、このカナン地の北にはレバノン山脈が南北に走っているが、この山脈の西側は地中海に面して豊かな平野がへばりついている。この土地は古代からざくろと葡萄の産地であつたと言われている。そしてこの土地で遊牧している人々の食事は、古代から現代に到るまで基本的な材料は変わらず、同じような食事をしていられると言われているが、ワラカ・アイナブと呼ばれる干し葡萄と香料を加えた米を葡萄の葉で包んで蒸した料理は今なお味わうことができるのである。ちょうど日本の柏餅やちまきの様に用いた葉の薫りが、中の具に移ってとても風味のある美味しい御馳走である。パレスチナは早くから農耕文化の進んだ都市を地中海海岸に建設したにもかかわらず強大な統一国家を作ることができなかった理由は、地理的条件のために絶えず戦場となり、また、ヨルダン川の深い谷底を流れる水を農耕に利用することができずに、天水のみに頼っていたからである。そして現代でも川の水利用をめぐるユダヤ人とアラブ人との紛争が絶えないのである。灌漑の共同作業を通じて共同体規模の拡大と権力の集中が可能であつたメソポタミアとは異なっていたが、海岸にはテュロスやビブロス、ウガリットなどの城壁で囲まれた町があり、このあたりをフェニキアと呼んだ。すなわちこの時代には、エジプト人がビブロスと交流を保ようになり、すでに古代オリエントで最も貴ばれたラピスラズリが、その産地である東のアフガニスタンから西はエジプトに至る5000キロにわたる交易の路が開かれていたのである。従つてこの交易路は様々な商品や食糧、その他の宝石や金銀が隊商によって、またはユーフラテス河の流れに乗って運ばれたであらうし、文化の交流もなされたに違いない。紀元前2000年頃には西方へエーゲ海のクレタ島に、そして紀元前1300年頃にはギリシア本土へと、この地に住んでいたフェニキア人が葡萄の栽培法とワインの作り方を伝えたことが知られている。そしてさらにヨーロッパへと広がって行った。

やがてバビロニアが統一されて（紀元前1800年頃）ハンムラビ法典が制定されるにおよんで、当時ひどく賤しい仕事とされていた酒亭に於ける金銭や人間関係で起きるトラブルに対する規則の中に、「主要な酒は、大麦製のビールと椰子酒であり、レバノンから輸入されたワインも飲むことができた。」などとワインに関することが規定されている<sup>4)</sup>。ここで当時のバビロニアではワインは作らず、一方レバノンにはワインを輸出するほど多量の葡萄が作られていたことが推察できる。その後紀元前10世紀後半のソロモン時代のものとされるヘブライ文字のゲゼル農事暦<sup>5)</sup>に「その2月は葡萄の剪定」と言う言葉が出てくる。これは古代イスラエルの農事暦で現行の暦では6－8月のことである。ちなみにイスラエルの七草はオリーブ、大麦、小麦、葡萄、いちじく、ざくろ、棗椰子である。

現在のトルコの中央高地は紀元前3000年紀はアナトリアと呼ばれ、この地方は既に新石器時代初期に人類最古の農耕社会が確立されて以来、金属器の生産と彩色研磨土器の開発によって、地中海沿岸はもとより西アジア各地に影響を与えていた。古代のトルコについてはカッパドキア文書に記録がある。やがてこの地にヒッタイト最初の帝国が築かれ、真に開花するのは紀元前1400年頃である。このころにはヒッタイト（聖書ではヘテ人）はシリアの北部制覇の目的でミタンニヤエジプトに対して干渉し始めた。当時エジプトのラメセス二世の軍隊を、シリアのカデシで撃退させたヒッタイトはシリア北部の支配権を確保したが、約500年後には小アジアの大国ヒッタイトの歴史の幕を閉じるのである。しかしこの地でもやはり葡萄は大切な植物であった。ここでもメソポタミアと同様に世界最古の物語り<sup>6)</sup>の一つとして、人間の身勝手な振る舞いに立腹したみのりの神が姿を隠したが、再び姿を見ることができた神に対して人々が捧げる歌の中に、葡萄が歌われているのである。また図5に示すようにタウルス山中にある磨崖の浮き彫りに大きな葡萄の房を腰につけた豊饒の神を見ることができる。そして今なおカイセリ、ギョレメ、ウルギユツプ、コンヤなどの町角には、干葡萄を売る店が見受けられるのである。



図5 タウルス山中にある磨崖の浮き彫り  
『世界の歴史2』 小川英雄（1988）より転載

「エジプトは暖かい気候とナイル川の豊富な水のお陰で、古代社会にあって飛び抜けて食糧事情の良い国であった。墓の壁画からは豪華な肉料理や魚料理、たくさんの種類の野菜や果物、パンというように、ほぼ現代と変わらないバラエティに富んだ食生活を満喫していたことがわかる。そして古代エジプト人の食卓に欠かせなかったのが、ビールとワインであった。」と吉村<sup>7)</sup>は『古代エジプト食文化考』に書いている。当時ビールは民衆の酒であり、ワインは神の酒であった。エジプト第一王朝のころ（紀元前3000年頃）すでに葡萄が栽培されワインが飲まれていたことが分かっている<sup>8)</sup>。初期王朝の墳墓から死者とともに葡萄の房をならべて埋めたあとが認められ、王家の谷



図6 ナクト墳墓の壁画（第18王朝）

「エジプトは暖かい気候とナイル川の豊富な水のお陰で、古代社会にあって飛び抜けて食糧事情の良い国であった。墓の壁画からは豪華な肉料理や魚料理、たくさんの種類の野菜や果物、パンというように、ほぼ現代と変わらないバラエティに富んだ食生活を満喫していたことがわかる。そして古代エジプト人の食卓に欠かせなかったのが、ビールとワインであった。」と吉村<sup>7)</sup>は『古代エジプト食文化考』に書いている。当時ビールは民衆の酒であり、ワインは神の酒であった。エジプト第一王朝のころ（紀元前3000年頃）すでに葡萄が栽培されワインが飲まれていたことが分かっている<sup>8)</sup>。初期王朝の墳墓から死者とともに葡萄の房をならべて埋めたあとが認められ、王家の谷

からデル・エル・バハリへ行く道の南側にある貴族の墓のひとつ、第十八王朝（紀元前1600年頃）のナクトの墳墓の葡萄摘みと葡萄絞りの壁画は有名である。（図6）また著者が訪れた王家の谷から最も近いクルナ村の地下の地方長官であったセンネフェル（紀元前1300年頃）の墓室には、天井一面に葡萄の絵が画かれていて、まさに葡萄棚の下にいる思いがする見事なものであった。この葡萄の栽培法やワインの製法はカナンの地から豊かなエジプトへ移住したセム人たちによって伝えられたとされている。

## 4 オアシスの葡萄

これまで取り上げた葡萄にまつわる土地や地方を地図の上で眺めて見ると、すべて砂漠地帯のオアシスである。いずこも大山脈からの雪解け水や地下水を利用して灌漑農業を営み、気温の変化が激しい乾燥地帯である。そしてこの葡萄が砂漠のオアシスに住む人々は勿論のこと、砂漠を旅する人たちにとってもまた大切な植物である。筆者が最近訪れたイエメンは、も早やかつての幸福のアラビアと呼ばれる繁栄は見るべくもないが、砂漠の中の、または岩石の上にある町の、そして紅海に面する海岸の町のスークには野菜や肉類や菓子類、香料類や貴金属、その外衣料品など混然とした中に小指の先位の大きい干し葡萄が山のように積んで売られていた。駐日イエメン大使館の日本人向けの観光案内には、「葡萄の原産地は西アジア一帯に分布しており、イエメンでも古くから葡萄が栽培されていた。紀元前10世紀頃の碑文には、王国の富の象徴として牛の頭とともに、必ず葡萄の葉と実が彫り込まれている。日差しが強く、昼と夜の温度差の激しい山岳地帯の盆地の気候は、実のしまった甘みのある葡萄の成育に適しており、現在でも首都サナアの周辺では葡萄の栽培が盛んである。またイエメンの都市では塙で仕切られた家の敷地の中に中庭が必ずあって、ここに噴水と葡萄棚を作って、その庭を眺めながらくつろぐことが出世のあかしとされている。ただしイエメンはイスラム教なので干し葡萄は作るがワインは作らない。」と書かれている。

今より100年程前にウイリアム・ギッフォード・パルグレーヴがヨルダンのマーンからサウディ・アラビアのリアドまで、実に1200kmのネフド砂漠を横断した旅の記録<sup>1)</sup>には、真夏の灼熱の砂漠の凄さとともに、途中で立ち寄ったオアシスの町ジョーフ、ハイール、ブライダそしてリアドの手前の廢墟ダルーヤまでの様子が詳細に書かれている。オアシスの町家には屋根代わりに葡萄の蔓がはわしてあり、葡萄の葉陰は炎暑の道を命がけで越えてきた旅人の憩いの場所となるのである。そして重そうに垂れた葡萄の房の下に座り、さらさらと流れる川のせせらぎを聞きながら味わう葡萄の味は、チグリス川流域のものよりも遥に上質であったと述べている。まさにイスラムの世界における天国である。ふたたび砂漠に向かって旅を始めようとするときには、準備する食糧のなかに必ず干し葡萄を加えているのである。

H & A・モルデンケ<sup>2)</sup>はアルメリアの丘陵地帯とカスピ海に面した諸国、特にこの海の南岸に面した国（アゼルバイジャンと北部ペルシア）が葡萄の原産地と考えられているが、今なお神秘的なベールに包まれていると言っている。一方ペルシアの発祥地はイラン高原西部で、その大部分を占める地域であり、東はインダス川から西はティグリスおよびユーフラテス川におよんでいる。そこは乾燥した高原で、広大な不毛のエルブルス山脈がこれを見下ろしている。原住民としてのカスピ人が高原に住んでいて、彼らは多分農業と冶金術とを初めて発達させた人々であったと思われる。以上の事から推測すれば、カスピ海南沿岸では、それ以前に既に葡萄栽培が行われていたとするのが妥当である。言うまでもないが先に述べた中国古代の西域の葡萄の産地高昌（トルファン）、疏勒（カシュガル）、康国（サマルカンド）、



安息（イラン高原の辺り）、大宛（フェルガーナ）には、すでに紀元前2世紀には当然これらのオアシス都市を中心として、広範囲に渡って葡萄が栽培されていたのである。著者が訪れたこれらの地方の住宅の中庭には、葡萄棚が作られているのを垣間見ることができた。またトルファンの街を貫く大通りの実りの時期の葡萄並木は実に見事で、その下を行く人の心に安らぎと豊かさを感じさせるのである。（写真4）なおサマルカンドの南80kmにあるシャフリサブスの、ハズレト・イマム寺院の境内の葡萄棚の下で、メドレッセでの勉強を終えて出て来た少年達とおしゃべりをしたあの楽しかった場面を懐かしく思う。



写真4 トルファンの大通りの葡萄並木

トルファンにて、筆者撮影

なお南に遠く離れて、紀元前1800年頃にはすでに衰退し始めたと言われるインダス文明の主要な例証はスワート渓谷から発見されているが、そこでは様々な時代と文化層に分かれて見ることができる。すなわちスワート流域のロエバンル第3期の堅穴式住居の食糧貯蔵穴から、炭化した米、小麦、大麦、レンズ豆、エンドウそして葡萄など極めて多様な食糧が、紀元前1700-1500年頃のものとして発見されている<sup>3)</sup>。S.N.クレーマは「この流域の人々が西隣り、つまり南メソポタミアのシュメール人と商業上の強い絆で結ばれていたことは十分に立証済みの事実である<sup>4)</sup>」と述べているが、事実ペルシアの向こう側にあるバルチスタンは大部分が砂漠であるが、またまさしくイラン高原文化とインダス川流域の文化が接触したと思われる地点なのである。

またこの地から西にあるイランのシラーズはバラとワインの町として有名であり、15世紀の有名な叙情詩人ハーフィズとともに、葡萄を含めて果実のおいしいことでも有名であり、近くには有名なペルセポリスがある。ここを起点としてキュロス大王やダリウス一世などイラン人の活躍により、やがて紀元前550年頃にはイラン高原を政治的に統合して、古代ペルシア帝国アケメネス朝が始まったのである。このアケメネス朝以来、パルティア朝、ササン朝そしてイスラムの時代へと、各王朝は、東から中国やインドの古代文化を、西からオリエント、エジプト、ギリシア、ローマの文化を取り入れて、独自のペルシア文化を築き、ふたたび東西にこのペルシア文化を広めたのである。時あたかも中国は唐の時代であり、やがて日本と唐の交流が始まったのである。この町を出て北に向かって砂漠を400kmも走るとイスファファンがあり、さらに北へ砂漠を約400kmもつっ走ると首都テヘランである。このテヘラン考古博物館には、ササン朝の金銀製の豪華な食器が多く展示されているが、その中でマザン・デラン地方から出土した6世紀の杯の外側には、4人の女楽師とともにたわわな葡萄の房を見ることができる。（図7）、今なおイランのあちこちの街のスークにはやはり溢れるばかりの干し葡萄が売られている。勿論著者らが泊まったホテルの各々の部屋にはざくろ、メロン、オレンジなどと共に緑の大粒な葡萄が用意されていた。勿論それらのおいしかったことは言うまでもない。



図7 四人の女楽師 マザン・デラン地方出土 底の丸い杯の外側の一部分

『古代イランの美術』 新潮社(1966)より転載

「見事なワインを産出する地方は総て土壤が貧弱で耕作が困難である。しかも葡萄の木の根は25メートル位も深く入り、じっくりと少しずつ岩石の成分を溶かして来た地下水を吸い上げた葡萄からのみ素晴らしいワインができる<sup>5)</sup>。」とのことである。遠く昔にバビロンまでワインを輸出していたシリアは、当然オリエントの文明の十字路としてメソポタミア・エジプト・地中海の諸文明の影響を受けつつ、豊かで多彩な文明を繰り広げてきたが、シルクロードの交易が盛んであったころに最も栄えた隊商都市パルミラの遺跡では、アゴラの崩れ落ちた梁石に美しい葡萄唐草の彫刻（写真5）が見られる。なおその近くのネクロポリスの有名な3人兄弟の地下墓には、



写真5 パルミラのベル神殿の梁に残る葡萄唐草

筆者撮影

極彩色の葡萄唐草が描かれた漆喰の壁面を見ることができし、また2世紀のヤルハイの胸像に見る葡萄唐草文様は実に見事である<sup>6)</sup>。シリア、レバノンの海岸に住んでいたフェニキア人によって、クレタ島やギリシアに伝わったとされる葡萄の木はさらにローマへと広がって行くのであるが、紀元前540年にはフランスへそしてその後間もなく南部ヨーロッパへもたらされたと言われている。事実クレタ島には紀元前15世紀の葡萄を搾り、果汁を受ける容器が存在する。葡萄の房が枝もたわわに、帆柱に蔓が絡んだ船に乗って海を行くバックスが描かれた酒杯は紀元前530年頃のものである。またオリーブ油、葡萄酒、時にはアーモンドやピスタチオなどを輸出するのに用いられたアンフォラ（素焼きの底が尖った壺）がアテネのアゴラから出土している。それらは紀元前4-5世紀のものである<sup>7)</sup>。

以上のような出土品を挙げればきりが無いが、要するにこれらの葡萄に関する出土品があり、なお葡萄が栽培されているところは、砂漠地帯と言わないまでも、瓦礫の多い野菜や穀物栽培には向かない土壌なのである。

## 結 語

葡萄のルーツを日本、中国そして聖書に物語られている国に求め、結局は温度差が激しい西アジアに原点を見いだした。そこは砂漠地帯の乾燥を強いられた激しい土地ではあるが、葡萄にとっては居心地のよい所であつたらしい。そして葡萄は古代から現代に至るまで、その地に生きてきた人間の生活になくなくてはならない大切な植物であることが、本稿の全体を通じて実感されるのである。それは、①食料として 手を加えないで直ちに口にすることができる果実は、調理を知らない原始の人々にも馴染み深い食品であつたであろうし、干しぶどうは携帯食、保存食、物々交換の品としての価値が高く、また、動物性食品に対する植物性食品としての役割や香辛料、調味料として役割も果たしていたと推察できる。②水分と糖分の供給源としての砂漠や乾燥地での役割は貴重であつたろう。③ブドウ酒の原料として、気分転換や意気高揚、生活のアクセントとしてブドウ酒は人々の生活の中は浸透した。また、ブドウ酒は保存でき、携帯のきく水分として重宝されたと思える。④疲労回復、気付け薬、食欲増進等の薬用としての利用方法もあり、⑤葡萄棚が作る日影、観賞用のみどりとして、どれだけ多くの人達が憩い、心に安らぎが得られたことであろうか。そして、蔓は生活の道具作りの原料として貴重であつたであろう

し、⑥たわわに粒を付けた房はなにより豊かさの象徴として存在した。聖樹として崇められたのも当然である。美しい葡萄唐草とともに世界に広がった後も、時代をとおして人々が恩恵を受けている植物である。その恩恵は今も受け続けられ、人々に愛され、食べ続けられ、葡萄や干葡萄を用いた菓子や料理は数限りなく世界中に見られるのである。栄養面、料理と人々の生活については、今回は紙面の都合で掲載することができなかつたので、次の機会に譲る。

## 文 献

### 1-日本では

- 1) 清水 桂一 『たべもの語源辞典』 東京堂出版 1982 P.235
- 2) 松宮 節郎・鴨川 晴比古著 『ワイン入門』 カラーブックス 保育社 1992 P.103
- 3) 寺沢 薫 『縄文・弥生の生活』 森 浩一編 日本の古代4 中央公論社 1986 P.337-338
- 4) 世界大百科事典 19 平凡社 1967 P.408
- 5) 松宮 節郎・鴨川 晴比古著 『ワイン入門』 カラーブックス 保育社 1992 P.104
- 6) 倉野 憲司校註 『古事記』 岩波文庫 岩波書店 1978 P.27
- 7) 坂本 太郎他校註 『日本書紀 上』 古典文学大系 岩波書店 1987 P.92
- 8) 林 良一 『東洋美術の装飾文様』 植物編 同朋社出版 1992 P.241-242 3-文献

### 2-中国における葡萄の歴史

- 1) 花井 四郎 『黄土に生まれた酒』 中国酒、その技術と歴史 東方選書20 東方書店 1992 P.254-255
- 2) 小川 環・今鷹 真・福 吉彦訳 『史記列伝』 世界古典文学全集20 筑摩書房 1949 P.437-484
- 3) 花井 四郎 『黄土に生まれた酒』 中国酒、その技術と歴史 東方選書20 東方書店 1992 P.253
- 4) 城山 桃夫 『果物のシルクロード』 八坂書房 1983 P.14-17
- 5) 『人民中国』 一月号 人民中国社 東方書店 1993 P.37
- 6) 林 良一 『東洋美術の装飾文様』 植物編 同朋舎出版 1992 P.238-239

### 3-聖書から

- 1) 藤井 純夫他 『植物と文明』 西アジア新石器時代の場合 岡山オリエント美術館企画解説書 1982 P.22
- 2) 矢島 文夫訳 『ギルガメシュ叙事詩』 山本書店 1991 P.100
- 3) 河野 友美 『食べものからみた聖書』 日本基督教団出版局 1986 P.43
- 4) J. G. マッキーン 岩永 博訳 『バビロン』 法政大学出版局 1989 P.85
- 5) 高橋 正男 『アブラハムから死海文書まで 旧約聖書の世界』 時事通信社 1991 P.234-235
- 6) H. ガスター 矢島 文夫訳 『世界最古の物語』 社会思想社 1988 P.141
- 7) 吉村 作治 『古代エジプト食文化考』 NHK学園 『古代オリエント』 第20号 1992 P.5
- 8) 同上 P.7

4 - オアシスの葡萄

- 1) 前嶋 信次 『アラビアに魅せられた人びと』 中公文庫 中央公論社 1993  
注：ウイリアム・ギッフォード・パルクレーヴ著「アラビア旅行記」の自由訳
- 2) H & A・モルデンケ 奥本 裕昭訳 『聖書の植物』 八坂書房 1981 P. 147
- 3) 江上 波夫監修 『古代オリエントの世界』 図説世界の考古学2 福武書店 1977 P.198-199
- 4) S. N. クレーマ 久我 行子訳 『シュメールの世界に生きて』 ある学者の自叙伝 岩波書店 1989 P.272
- 5) 河野 友美 『食べものからみた聖書』 日本基督教団出版局 1986 P.37-38
- 6) ロマン・ギルシュマン 新 規矩男訳 『古代イランの美術Ⅱ』 新潮社 1966 P.77
- 7) 馬場 恵二 『世界の歴史』 ギリシア・ローマの栄光 講談社 1988 P.42, 43